

伊野川から忠別川までの地名⑭

前回は、安政四年(一八五七年)に松浦武四郎が、アイヌの人たちの漕ぐ丸木舟に乗って石狩川を遡り、掲載地図(現行二万五千地形図)の「近文山」の所で、「チカプニ」左山に大岩見ゆ、「転び落つべきかとも思ふ形也。地位南向きにてうしろの方平山を屏風を立てし如く廻り、その間平地にて風景よろし」と記述したことを紹介した。その上で、松浦武四郎自筆の「チカプニの図」と、石狩川の下流から見た「チカプニの大岩」の写真を掲載した。丸木舟から見た、松浦武四郎の実感を理解していた

ただためであった。さて、今回の写真は、「チカプニの大岩」を対岸から写したもので、この大岩が、地名の「近文」の起源となった大岩である。

掲載地図の「チカプニ」は、明治三十一年製版の『北海道仮製五万分一図』に記載された位置をそのままこの地図に転記したものである。この地図のアイヌ語地名は、明治二十四年刊行の永田方正著『北海道蝦夷語地名解』に準拠している。

永田方正は、「近文」の地名起源の「チカプニ」について、右の書で次のように記述している。

チカプニ(chikapuni=chikapuni)鳥居ル処——此ノ山ノ川ニ臨ミタル処ノ山面ニ大岩アリ。鷹常ニ来テ此ノ岩上ニ止マル。故ニ名ク。

永田方正は、チカプニ(chikapun)は、個々の発音は、チカプ(chikap)鳥・ウン

冒頭に記し、次にその由来を書いて、「チカプニ」の地名解とした。

『北海道仮製五万分一図』では、永田方正の地名解の大岩の位置に、わざわざ「チカプニ」と記載したのである。

ところが、永田方正より早く、明治十八年八月に、司法大輔(現在の次官)の岩村通俊が近文山に登り、いわゆる「国見」をして、翌年、この近文山に「国見の碑」を建てた。岩村通俊は、この「国見」の時に、「チカプニ」と言われていた山に、「近文山」という漢字を当てたのである。これが、地名「近文」の起源となつたのである。

しかし、岩村通俊の命名した「近文山」の「ちかぶみ」と、「チカプニ」では音が合わないのである。その理由が、岩村通俊が明治十九年に初代北海道庁長官に就任、翌明治二十年十月十三日に、再び近文山に登るが、その時の紀行文で判明する。

(前略)石狩本川ニ出テ紆余曲折シテ下リ、十時四分前近文山下ニ達ス。府ヲ捨テ上陸ス。近文ハアイヌ語「チュツカブミ」ニシテ、鳥ノ住スル所ト云フ義ナリ。此川魚多クアイヌ之ヲ漁スル時、其ノ魚腸等ヲ抛ツヲ以テ鳥之ヲ啄シカ為メニ、常ニ此山上ニ集ルニ因ルト云(後略)——二十年十月、上川紀行案」

「国見」の時点で、

近文山のアイヌ語を「チュツカブミ」と聞き、それに漢字の「近文」を当てたところが推測

できる。この「近文」の漢字表記が、大地名に展開していったのである。

昭和三十五年に、知里真志保は、「上川郡アイヌ語地名解」の中で、永田方正の地名解を踏襲して、「チカプニ」について、次のように地名解をした。

チカプニ(chikapuni)鳥・来る・所(近文山の川に臨んだ山面に大きな岩があり、いつも鷹が来て止まっていたのでこの名がついた)という。音訳して「ちかぶみ」(近文)という地名が生まれ、意識して「たかす」(鷹栖)という地名が生まれた。

永田も知里も、明治十八年に誕生した、漢字表記の「近文」誕生の謎は、知らなかったようである。

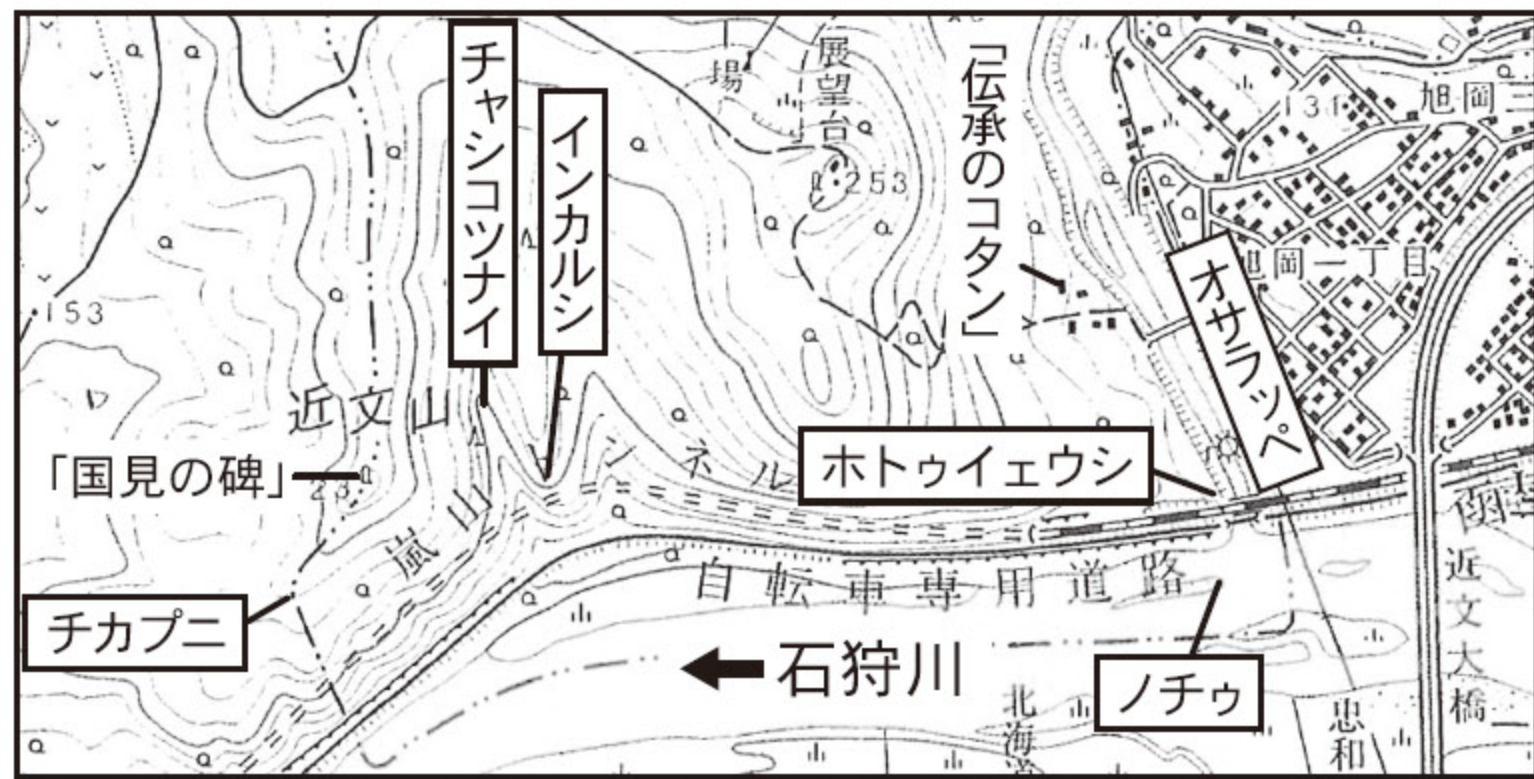


チカプニの大岩

断章 旭川のアイヌ語 地名研究

125

高橋 基



鳥・ウン (uni) いる、住む・イ (i) 処、所で、続けて発音すると(連声の法則) エゾンニ (aison)、チカプニ (chikapuni) となることを

岩村通俊は、明治十八年の近文山の

アイヌ語地名研究會幹事 ※毎月第1週号に掲載します